

東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所基幹研究「アフリカ文化研究に基づく多面的世界像の探求」2015年度第6回公開セミナー報告

タイトル：個体主義にもとづく共生の論理～東アフリカ牧畜民の日常生活から～

日時：2015年12月18日（金）17時45分～20時00

場所：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所小会議室（302）

司会：目黒紀夫（AA研）

講師：波佐間逸博（長崎大学）

コメンテーター：北村光二（岡山大学名誉教授）、佐川徹（慶應義塾大学）

参加者：12名

内容：

今回のセミナーで講師を務めた波佐間逸博氏のフィールドは、ウガンダ北東部乾燥サバンナ帯のカリモジャ地域である。調査対象は、そこに暮らす牧畜民のカリモジョンとドドスである。近年、東アフリカの牧畜社会には自動小銃が流入するようになっており、武装化した牧畜民によって地域紛争が引き起こされているという理解のもとで国家は武装解除という名の暴力的な介入を行なうようになってきている。こうした理解と介入の前提には、野蛮で暴力的な牧畜民というステレオタイプな偏見にもとづいている。それに対して波佐間氏は、牧畜民とその家畜とのあいだの日々の営みをつぶさに観察することを通じて、牧畜を介した人間—家畜関係が単純な支配—従属関係ではなく、人と動物とがたがいを個として認識して意識的にコミュニケーションを図ることによって成立する共生的な関係であることを論じた。そして、アフリカ社会の特徴として指摘される民族的なアイデンティティの重層性と流動性が、家畜動物をすべて「家畜」として一括りにして一方的に管理するのではなく、個々の主体性に注意を払い双方向的な交流を図る牧畜のあり方と連続している可能性を指摘した。

こうした波佐間氏の講演に対して、一人目のコメンテーターである北村光二氏（岡山大学名誉教授）からは、タイトルにもなっている「個体主義」という言葉へ疑問が提示された。カリモジョン・ドドスの人たちは個と集団のどちらか片方を絶対化することなく、状況に応じてその二つのカテゴリーのあいだで柔軟に思考や実践を操作しているという波佐間氏の主張に賛意を示した北村氏だが、しかし、そうした牧畜民の特徴を「個体主義」という言葉で表現してしまうと、個と集団のうち前者を過度に強調することによって後者の側面を軽んじることになるのではないかと問うた。また二人目のコメンテーターである佐川徹氏（慶應義塾大学）は、「かけがえない個」として強い愛着を持っている家畜が強奪されても取り返しに行かないという事実をどう解釈すればいいのかという疑問と、牧畜社会に生まれた個人が牧畜民としての個を社会的に確立するうえで大切に思われる牧童時代についての分析が欠けているのではないかと指摘が出

された。波佐間氏は、北村氏のコメントに対してはこれまでの牧畜民に対する偏見交じりの議論が過剰に集団の原理を強調しているので、それへのカウンターとして個の側への注意を喚起する必要があるのではないかと考えていることを説明した。また、佐川氏の一つ目の質問については、奪われた家畜がサバンナのどこかで生きているという確信めいた認識があるからこそ喪失を嘆くことをしないのではないかと返答した。二つ目の疑問については、その指摘の妥当性を認め、それを今後を検討していくつもりであることを説明した。これ以外にも、放牧中に人間が家畜の行動を統制しようとする行為や家畜が個々の人間を認識している点について、根拠となるデータの詳細やより抽象的・普遍的な議論としてどのような方向性に発展する可能性があるのかなどが、コメンテーター以外の参加者も交えて議論された。

※当報告の内容は著者の著作物です。 Copyrighted materials of the authors.